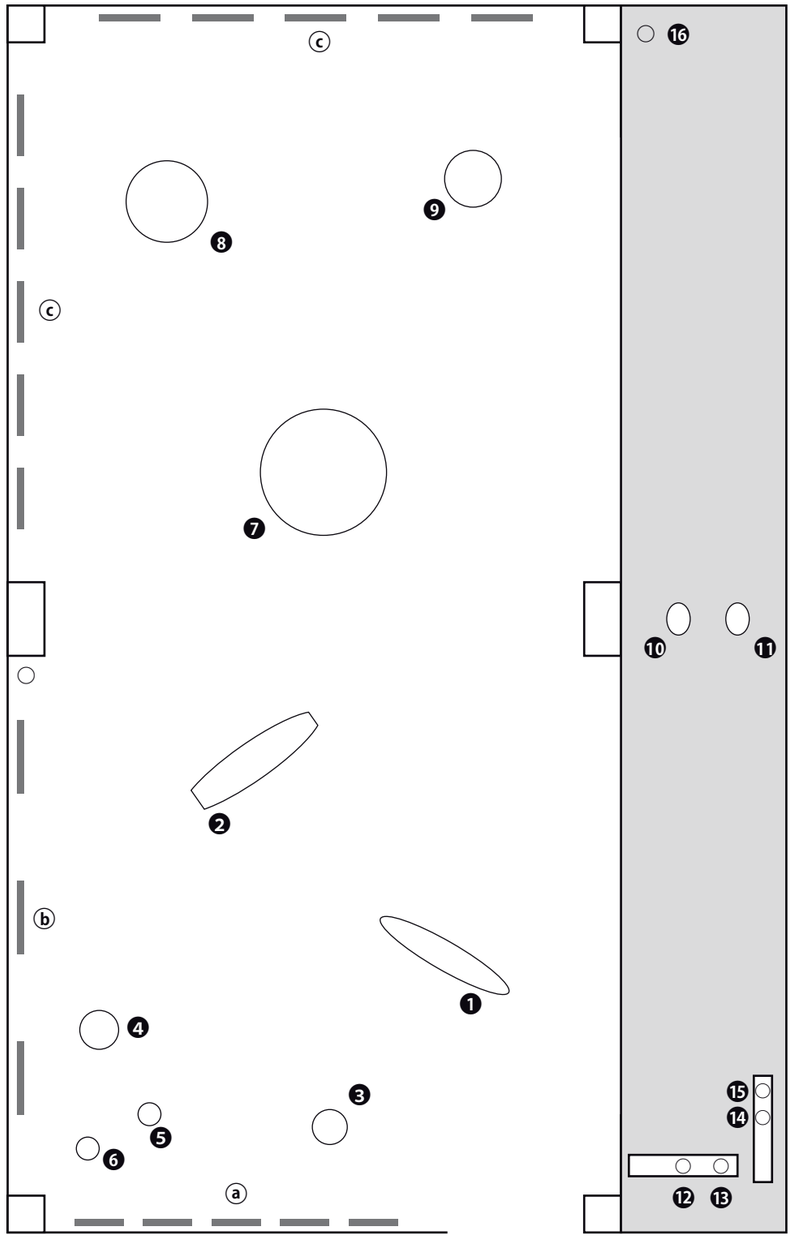
# からみあうもの きざまれたとき

山添 潤　石彫　—2022　ギャラリー・パルク




| | | | |
|---|---|---|---|
| ❶ 刻　2005 | 2005 | 大理石 | h400×w1500×d370mm |
| ❷ 刻　2005−2 | 2005 | 大理石 | h360×w1200×d380mm |
| ❸ 刻　2005−1 | 2005 | 大理石 | h1500×w400×d500mm |
| ❹ 刻　点 2006/2022 | 2006/2022 | 大理石 | h460×w510×d505mm |
| ❺ 刻　点 2022 - 被 - | 2022 | 大理石 | h210×w215×d230mm |
| ❻ 刻　点 2022 - 被 - | 2022 | 大理石 | h215×w225×d225mm |
| ❼ きざみもの 参 | 2022 | 黒御影石 | h280×Φ800mm |
| ❽ きざみもの 壱 | 2020 | 黒御影石 | h490×Φ600mm |
| ❾ きざみもの 弐 | 2020 | 黒御影石 | h370×Φ700mm |
| ❿ 石の軀　Ⅷ　陰 | 2017 | 黒御影石 | h1570×w300×d400mm |
| ⓫ 石の軀　Ⅷ　陽 | 2017 | 黒御影石 | h1570×w300×d400mm |
| ⓬ work 2016−d | 2016 | 黒御影石 | h140×w145×d105mm |
| ⓭ work 2016−h | 2016 | 黒御影石 | h135×w210×d200mm |
| ⓮ work 2016−k | 2016 | 大理石 | h70×w110×d90mm |
| ⓯ work 2016−j | 2016 | 大理石 | h108×w155×d150mm |
| ⓰ work 2016−c | 2016 | 黒御影石 | h93×w200×d190mm |

ⓐ 右から

| | | | |
|---|---|---|---|
| 方形の闇 2012 III | 2016 | 紙、鉛筆 | h465×w465mm |
| 方形の闇 2012 II | 2016 | 紙、鉛筆 | h465×w465mm |
| 方形の闇 2016 V | 2016 | 紙、鉛筆 | h465×w465mm |
| 方形の闇 2016 IV | 2016 | 紙、鉛筆 | h465×w465mm |
| 方形の闇 2016 III | 2016 | 紙、鉛筆 | h465×w465mm |

ⓑ 右から

| | | | |
|---|---|---|---|
| 方形の闇 I | 2018 | 紙、鉛筆 | h755×w755mm |
| 方形の闇 II | 2018 | 紙、鉛筆 | h755×w755mm |
| 方形の闇 III | 2018 | 紙、鉛筆 | h755×w755mm |

ⓒ 右から

| | | | |
|---|---|---|---|
| きざみえ 時の環 I | 2020 | 紙、鉛筆 | h755×w755mm |
| きざみえ 時の環 II | 2020 | 紙、鉛筆 | h755×w755mm |
| きざみえ 時の環 III | 2020 | 紙、鉛筆 | h755×w755mm |
| きざみえ 時の環 IV | 2020 | 紙、鉛筆 | h755×w755mm |
| きざみえ 時の環 V | 2020 | 紙、鉛筆 | h755×w755mm |
| きざみえ 時の環 VI | 2020 | 紙、鉛筆 | h755×w755mm |
| きざみえ 時の環 VII | 2021 | 紙、鉛筆 | h755×w755mm |
| きざみえ 時の環 VIII | 2021 | 紙、鉛筆 | h755×w755mm |
| きざみえ 時の環 IX | 2021 | 紙、鉛筆 | h755×w755mm |
| きざみえ 時の環 X | 2021 | 紙、鉛筆 | h755×w755mm |

京都市内の高校を卒業後、関東に渡って私塾にて彫刻を学び、二〇〇〇年代より本格的に彫刻に取り組む山添 潤（やまぞえ・じゅん／京都生まれ・一九七一）は、これまで関東・関西ともに積極的な発表を続けています。とりわけ、茨城県筑波山麓にてほぼ隔年で開催されている野外彫刻展「雨引の里と彫刻」には、二〇〇一年より参加するなど、およそ二〇年以上に渡って「石を彫る」ことに向かいあってきました。

石塊を前に山添は『よくは分からないけど、でも確かにそこに「何か」が在る』といった予感を頼りに、それを確かめるために石を刻んでいきます。目指す完成形や具体的なフォルムを決めずにノミやタガネによって石を打ち、そこに生じた微かな応答を頼りに次を打つ。その軌跡は無数のノミ跡となって残り、ひとつのカタチとなって現れます。それは石との対話の軌跡であり、石と山添が互いを媒介にして発した不定形な聲のように思えます。それはまた、山添の問いへの答えでもあるとともに、山添への新たな問いともなって、また次の対話へのきっかけともなります。

**地球の断片である石を手で彫る**
**ゆっくりとゆっくりと彫り刻む**
**おそろしく単調な行為を繰り返す**
**石は刻々とその姿を変えながら私のノミ跡で覆われてゆく**
**彫る（減らす）というよりは**
**自分の力 流れてゆく時間などを**
**石の表面に押しつける（増やす）ような意識で**
**刻みつけながら石を塊化させてゆく**
**その時 石に寄りかかり過ぎても**
**自分を押しつけ過ぎてもうまくはゆかない**

**石との長いやりとりの中**
**手さぐりで終着点をさがす**
**そのようにしてゆっくりとゆっくりと**
**私の彫刻は生まれるのです**

こうして山添は、およそ20年に渡って、石、あるいは自分自身との対話を続けてきたといえます。しかし、これまでの作品に見られる「対話の軌跡」には時々の変遷がみられます。

石彫に取り組み始めた当初の山添は、石を素材に「自身が目指すカタチ」に向かって、石を彫っていたように見えます。しかし、技術をもって石を制し、目指すカタチに石を沿わせるかのようなその制作に次第に疑問を抱いた山添は、二〇〇四年の個展に向けた制作において、「微かな予感を頼りに、完成形や具体的なフォルムを決めない」という、現在に至る自身の石彫を模索し始めます。

その最初の取り組みとなった作品《**刻 2004**》［オーエヤマアートサイト展示作品］以後、山添はこのアプローチを深め、作品《**石の軀**》［オーエヤマアートサイト展示作品］などに見られる「不定形でありながら、確かにそこに在るカタチ」を現すに至ります。

**刻**
力は石へと向かう
力は石に残され刻まれる
刻まれると同時にそれに反発し
そこに留まれなかった結果として
砕け飛び散る外へと向かう力が生じる
その外へと向かった力を
再び石の中へと向かわせる
その一打一打にこの身をゆだねてみる
その一打一打に石は包まれる

**きざみもの**
円筒形にカタチを限定し
ノミを通じて伝わる自分の力を石に刻み込む
石の質量を減らしながら
増えてゆくノミ跡の重なり
単純なカタチの中に様々なものを刻み込めればと思う

私が石を彫りきざむというのは
減らしながら増やすということなのです。

同時に山添は石とノミの接触においても、いくつものアプローチを試みています。鋭利なノミでひとつの点を穿ち、そこを起点に平たいノミで周囲を刻んだもの、先を潰したノミにより石に圧を加え、そこに生じる歪みや揺らぎを増幅させてカタチに結実させたもの。

本企画は、現在に至る山添にとってその起点ともなった二〇〇四年から現在までのおよそ20年近くの取り組みを、ギャラリー・パルクとオーエヤマ・アートサイトというふたつの空間を会場に展開するものです。これにより山添のおよそ20年におよぶ取り組みを連続性の中で検証し、現在を知り、これからの展開を思う機会でもあります。

目の前のノミ跡のひとつひとつ、作品のひとつひとつは、現在までに山添が経てきた「時間そのもの」の積み重ねとも言えます。それはまた、地球とともに在る石、築400年を超える旧酒蔵、竣工1年足らずのギャラリー・パルク、いまここに立つ鑑賞者のそれぞれの時間が、石彫を軸に交錯する機会を生み出します。

山添の予感と検証の行為、そこに現れたカタチはまた、山添の進む「ここから先」について、どのような予感を感じることができるでしょうか。

石を彫るのだから当然質量は減少していくのだけれど
私のノミ・タガネなどを通した力は
石に刻まれながら増えてゆく
そしてその力で石全体を包み込む

**きざみえ**
紙の中心から放射状に円を描き
外側へ外側へと拡げてゆく
鉛筆の鉛 時間 心の揺らぎ
いろいろなものが円の中に刻み込まれる

**石の軀**
石を彫る
その瞬間から石の存在は曖昧になってゆく
石は僕の力を呑み込みながら
その質量を徐々に減らす
力と時間が重なり合い纏わりつく痕跡
やがてその集積が溢れ出し塊化してゆく
そこから、僕の仕事が始まるのだと思う
躯をもちはじめた石の確かな存在を感じたい


山添 潤
1971年 京都府生まれ
1995年 KOBATAKE 工房修了


2022 「雨引の里と彫刻2022」（茨城）［01・03・06・08・11・13・15・19］
2021 個展（ギャラリー揺・京都）
2020 個展（トキ・アートスペース・東京）
2017 個展（川越市立美術館・埼玉）
2016 個展（Gallery PARC・京都）
2013 個展（Gallery PARC・京都）
2011 個展（ギャラリー揺・京都）
2010 個展（メタルアートミュージアム 光の谷・千葉）
2009 個展（アートスペース虹・京都）
＊ 「Art Court Frontier #7」（Art Court Gallery・大阪）
2008 個展（トキ・アートスペース・東京）
2006 個展（アートスペース虹・京都）

【展覧会概要】

**からみあうもの　きざまれたとき　山添 潤 石彫 ―2022**

2022年11月5日［土］～20日［日］［水］［木］休廊　13時から19時まで／入場無料
ギャラリー・パルク（京都府京都市上京区貝茨町287 堀川新文化ビルヂング）

【同時開催】

**きざまれたもの　からみあうとき　山添 潤 石彫 2004―**

2022年11月5日［土］～21日［月］　期間中［土］［日］［月］のみ開場　11時から16時30分まで／入場無料
**オーエヤマ・アートサイト**（京都府南丹市八木町八木鹿草71［八木酒造］）

主催 ギャラリー・パルク　協力 オーエヤマ・アートサイト　助成 京都府文化財活用推進事業

［アクセス］
○ JR［京都駅］より嵯峨野線（約30分）で［八木駅］下車。「八木」交差点を国道9号線を越えて直進。突き当たり丁字路を右折。「八木酒造」入口より会場。○京都縦貫道［八木東IC］より国道9号線を西へ「八木」交差点を北に1分。○専用の駐車場はございません。なるべく公共交通機関でご来場ください。

［記録集］
本展の記録集を制作します。記録集・送料ともに無料で一冊お送りしますので、ご希望の方は下記 QR コードからお申し込みください。（2023年3月頃発送予定）


［主催・企画・問い合わせ］
ギャラリー・パルク
075-334-5085 / info@galleryparc.com / www.galleryparc.com